

『ちくま評論選』解説

5 アニメのヒロイン像 斎藤美奈子

■凡例

- 1 ●は、本文。①②…は形式段落番号。◆は、設問。
- 2 ▽は、本文の追跡・分析。(解答例だけではなく、ここをこそ、読む。)
- 3 ▼は、読解に関する技法。
- 4 ☆は、記述に関する技法。

■追跡

① ●アニメの国の三〇年は、主役の少年たちを◆問1「ヒーロー」の呪縛から徐々に解き放つていった歴史だった、といえるだろう。古代進『ヤマト』↓アムロ・レイ『ガンダム』↓碓シンジ『エヴァンゲリオン』という流れにしる、コナン『コナン』↓アスベル『ナウシカ』↓アシタカ『もののけ姫』という流れにしる、これは少年がものを考えるようになっていった過程である。ものを考えはじめた少年は、もはや無邪気に戦うことはできなくなる。かくて単純素朴で勇猛果敢なアニメの国の英雄譚は崩壊せざるを得なくなった。

▽宇宙戦艦ヤマトのころ、ぼく(ま)は、小六。ガンダムにはあんまり興味なかったけど、エヴァは(子どもと)見た。(或る日の綾波レイという小説まで書いてしまった。『七月の海』に採録。図書室にあり)。宮崎アニメは、すべて見ている。でも、正直言って、ヒーローよりヒロインのほうが印象に残っているなあ…。――読者はこれらのアニメを見ている(知っている)という前提の説き起こし。なんとなくでも、イメージはできるだろうか。

この出だしのチェックポイントは▼「ものを考える」↑↓「無邪気に戦う」という対比。たしかに、碓シンジやアシタカは無邪気に戦うヒーローとはいいがたい。なお、以下論じられる「アニメ」には「特撮ドラマ」も一部含まれている。

※呪縛＝まじないをかけて動けないようにすること。また、心理的に自由をうばうこと。譚＝物語。

◆問1『ヒーロー』の呪縛とはどのようなものか。

☆切り身の方法、によって二つに分ける。ヒーローとは、英雄。呪縛とは、そうであるようにすることによって、かえって、自由を失わせること(呪縛は、(設問にしたくなる単語)リストに入っています!)。☆傍線部延長術、によって、前後を視野に入れると、「主役の少年たちは、(ヒーローの呪縛)から、解放されていった」ということになる。解放された、というのだから、やはり、自由を奪われていたのである。彼らほど

のように縛られていたのか。

「解答例」(アニメの主役の少年は)単純素朴で勇猛果敢に戦う英雄でなくてはならないという考えに縛られること。

② ●ならば、少女はどうだろう。アニメの国の少女たちは、ものを考えはじめただろうか？

▽問↓答。答えを探そう。

③ ●『エヴァンゲリオン』が図らずも残したのは、「チームの男女比が逆転すると組織は内側から崩壊する。」という事例であった。『もののけ姫』が残す印象は、以下のようなものだ。女のけんかは限度を知らない。女はふところが狭いので、敵の論理を認められない。女同士の間では話し合いが成立しない。『エヴァンゲリオン』と『もののけ姫』に共通したメッセージとは、つまり、「女には問題解決能力がない。↓大団円を迎えられない。」なのである。

▽具体例から帰納する書き方。※帰納↓『現キ』。作品の内容を知らなくても大丈夫。「女」の存在がもたらす結果についての事例ということさえわかればよい(『エヴァ』の場合男女比は、女>男)。▼定義語(とは、つまり)に注目。女II話し合いができない、問題解決能力がない存在。これらは、先の「アニメの国の少女たちは、ものを考えはじめただろうか？」という問いかけに対してどんな答えを示しているのか。答えはこうなる。「いいや、考えてはいない」。

④ ●存分に戦えなかった過去の恨みを晴らすように、アニメの国のヒロインは、いまやこぞって武器をもち、かつてのヒーローと選手交代するように、あるいは少年たちが「戦い」や「正義」を疑いだしたのと逆コースをいくように、男の子の国でも女の子の国でも戦いはじめた。しかし、男が救えなかった地球を、女が救えるだろうか？▽ヒロインが戦いはじめた(ものを考える代わりに、そして、ヒーローが戦わない代わりに)。▼(しかし)▽問↓答。女が地球を救えるか？ 答えを探そう。

⑤ ●最初にアニメの国の仕様を紹介したとき、男の子の国は女の子の国の平和な日常性を、女の子の国は男の子の国の社会性を少し見習った方がいい、といった。▽「最初に」とあるが、本文に、該当箇所はない。「女の子の国の平和な日常性」と「男の子の国の社会性」。現実の世界のジェンダー(性別役割。『現キ』参照)がアニメの世界に反映されているというとならえ方だ。「女は家庭」「男は会社」といった古典的な図式がアニメの世界でも展開されているという指摘。

⑥ ●読解問題1九〇年代以降のアニメの国は、事実、そちらへ旋回しはじめた。▽「そちら」とは？ 女の子の国に社会性が、男の子の国に平和な日常性が入り込む

こと。

●一貫して戦士の物語であった男の子の国も、魔法の力で洋服を着替えていればよかった女の子の国も、徐々に矛盾が拡大し、制度疲労がきたのである。これは、実社会の変化とも無関係ではないだろう。戦士としての正義をふりかざす滅私奉公の企業社会(↓男の子)や、王子様との結婚が人生最大の目標だった女性の生き方(↓女の子)じたいが、時代にあわなくなったのだ。

▽うーん、やはり、現実の反映だったか…。制度疲労がある制度が現実とそぐわないものになること。

■読解問題1 「九〇年代以降のアニメの国は、事実、そちらへ巡回しはじめた。」  
 というのはなぜか、説明しなさい。

★なぜ型↓のように型。どのようにして、九〇年代以降のアニメの国では、女の子の国に社会性が、男の子の国に平和な日常性が入り込むようになっていったのか。まず、端的に答えてみる。「実社会(の価値観)の変化につれて変化した」。具体的には? 「解答例1」「男の子は、戦士としての正義をふりかざす滅私奉公の企業社会で活躍し、女の子は、理想の男性と結婚することを人生最大の目標とする、といった価値観が、現実社会の中で時代に合わなくなっていくにつれて、アニメの世界でも、女の子の国に社会性が、男の子の国に平和な日常性が入り込むようになってきたから。」

「どのように」変化したか、の答えに「から」をつけた答案。古典的な図式が①時代に合わなくなる②アニメにも合わなくなる、の二点。②の視点に重点を置くと、より問いに対応した答案になる。例えば、

「解答例2」「男は企業戦士として、女は結婚を最大の目標として、といった生き方が時代に合わなくなってくると、実社会だけでなく、アニメの世界でも、そんな生き方の矛盾が拡大し、物語の設定として耐えられなくなってきたから。」

【読書案内】宇野常寛『リトル・ピープルの時代』二〇一一年  
 アニメは時代を映す? この本は、仮面ライダーシリーズなどの「ヒーロー」像から次代を論じている。

⑦ ●当然、ヒーローにもヒロインにも、新しい生き方が求められる。だが、アニメや特撮ドラマはもっかのところ、新時代のヒーロー像、ヒロイン像を、まだ創造できていないように見える。長い間、「戦士の物語」ばかりに明け暮れてきた後遺症か、女を戦わせることで、なんとか生き延びている格好だ。女の子の国の物語が学園ドラマ風の日常を基盤とし、ヒロインが愛だの恋だのうつつをぬかしてきたことを考えると、◆問2これは一見「発展」のように見える。

▽◆問2 「これ」とは何をさすか。「これは一見「発展」のように見える」とある

が、何が「発展に見える」のか。「アニメや特撮ドラマが、女を戦わせていること」が(以前に比べれば)「発展」のように見える、というのである。

「解答例」「アニメの国でヒロインが戦うこと。」

※「アニメの国」↓アニメ、アニメや特撮ドラマ、でも可。「ヒロイン」↓女、女の子、女の主人公、などでも可。

●だが、ヒロインが戦うドラマは、男の子の国のかつての活劇のように、すっきりと終わらせてはもらえない。「勝ち」が明確でない、矛盾に満ちた戦いを、彼女たちは強いられている。

▽ヒロインの「勝ち」は明確ではない、とは、どういうことなのか。

⑧ ●いまのアニメーションは、必ずしも子どものためのメディアではない。  
 ▽たしかに、高校生や若者、大人も見ね。

⑨ ●女の子の国のアニメが、ロリコンアニメの俗称で大人の男に愛好されているという話は、前にもちらっとした。魔法少女の変身が、体のいいコスプレであったことを思い出そう。セーラー服、スチューワーズ、看護婦、パッツパッツの水着状レオタード……といった服装(と大人の女の肉体)に幻想を抱いているのは、本当に小さい女の子たちだろうか。むしろ大きい男の子ではないのか。

▽コスプレと大人の女の肉体に幻想(妄想?)を脹らませているのは……やっぱ、「大きい男の子」ですね。「男の子」は、大きくなってアニメ好き。

⑩ ●反対に、大人の女性は概して少女アニメには◆問3冷淡である。彼女たちは、いい年になつたら、さっさとアニメの国を卒業してしまう。かつてそれに熱狂した自分を微笑とも思いつくことはあっても、大人になってまで『魔法のプリンセス ミンキーモモ』が好きで好きでたまらないという人など、まずいない。自分の娘が魔法グッズを買ってくれとせがむのを複雑な思いで受けとめるくらいが関の山だろう。

▽▼対比。「女の子」は大人になつたらアニメなど見ない。具体例による理解。

●当然といえば当然である。大人になつた女にとって、男親が望む少女像(魔法少女)や上司に都合のいいOL像(紅の戦士)など、うつつうつついものでしかない。アニメの国のヒロインは、魔法少女であれ紅の戦士であれ、男の子の愛玩物であったことは、やはり否定できないのだ。彼女たちは、男の視聴者を元気づけはしただろう。(それはそれで立派なことではある。)だが、歴代のヒロインが、女の子の視聴者を力づけ、彼女たちに勇気を与える女性像だったとは◆問4お世辞にもいえない。

▽「魔法少女」や「紅の戦士」についての説明がないが、直接的ないいかえをおさえておこう。「男親が望む少女像」「上司に都合のいいOL像」。どちらも、家庭や社会で、男が好む女性像であることがわかる。すなわち、「男の子の愛玩物」。

◆問3 「冷淡である」のはなぜか。

★問のいいかえ。「女の子は大人になったらアニメなど見ないのはなぜか」。続きを讀もう。「大人になった女にとつて」に注目！

「大人になった女にとつて、男親が望む少女像（魔法少女）や上司に都合のいいOL像（紅の戦士）など、うつつうかしいものでしかないから。」

これで、答え、とした人はおりまへんか？ 抜き出したままやね。さて、そろそろ、抜き出し式を超えていこう。もつと、文脈をふまえた、パチツとした答えにしたい。どうする？ 問いをさらにいいかえると、こうなる。

「女性は、子どもの頃は夢中だったのに、大人になったら少女アニメに冷淡になるのはなぜ？」

むかしは「うつつうしく」なかったのに、今は、「うつつうしい」。

【解答例】「女性は大人になったとき、少女アニメのヒロインが男の都合に合わせた女性像にすぎなかったことに気づくから。」

◆問4 「お世辞にもいえない」というのはなぜか。

まずは、★傍線部延長術。

「歴代のヒロインが、女の子の視聴者を力づけ、彼女たちに勇気を与える女性像だったとはお世辞にもいえない」のはなぜか。

さらに、いつもの★「どのように型への変換」。すなわち、このように問う。

「歴代のヒロインは、どのよう<sup>に</sup>にふるまってきた結果、女の子に勇気を与え得なかったのか。」

もう少し、続きを追跡して答えを見つけなくてはならない。

⑪ ● あれだけ大勢の紅の戦士を輩出してきたのに、しかもあれほど地球の救済や人類の解放にこだわってきたのに、読解問題2アニメの国には、女性の権利や解放に心を砕くヒロインがまったくといいいほいほいなかった。これは不思議なことである。そういうコワモテのヒロインは、保守的なアニメの国では面接試験で落とされるに決まっているにしても、である。

▽傍線部2は、否定的な言い方であるが、先の間4の答えの候補である。「歴代のヒロインが、女の子の視聴者を力づけ、彼女たちに勇気を与える女性像だったとはお世辞にもいえない」のは、「アニメの国のヒロインは、女性の権利や解放に心を砕くことがなかった」から。うん、つながっているぞ。でも、これでいいのかな。ここは、読解問題2でもある。もう少し先を見よう。どういう目で探したらいいのかな。

「アニメの国のヒロインのアカン」ところが書いてあるところは？」。そうそう、そういう目で探すんですね。

■読解問題2 「アニメの国には、女性の権利や解放に心を砕くヒロインがまったくといっていいほどいなかった」のはなぜか、説明しなさい。

【設問批判】ここが問4の答えの候補になるなら、この問いの答えと、問4の答えは重なるはずだ。うーん、これは、設問の作り方として、ちと、まずい。入試問題なら、問4と読解問題2を二つとも出すことはあり得ない。脚問は、読解の手がかりのための問いやからええけどね。

よし、しゃあないから、ここは二つまとめて面倒見ることにしよう。

⑫ ● ヒーローでさえ、男に一律に「戦え」と命じる男の子の国の論理と自分とのギャップに悩んで、ものを考えるようになったのに、ヒロインたちは、もののみごとものを考えようとしなない。ヒロインがものを考えるとは、女に一律に「セクシーであれ。」と命じる「男の子の国の論理」に抵抗すること。女はみんな恋の奴隷であれと命じる「女の子の国の論理」に反対することにほかならない。

▽ヒロインたちのアカンとところ、出てきましたぞ。「ヒロインたちは、もののみごとにものを考えようとしなない。」▼「とは」(定義) ツール。「ものを考える」≡男の子の国の論理に抵抗すること・女の子の国の論理に反対すること。面白いのは、男の子の国の論理も女の子の国の論理も、どちらも、「男の子の気に入る(セクシーな/かわいい)女の子になれ」という内容だということだ。ここは、ひとことでもとめると、

「アニメの国のヒロインは、男の子の気に入る(セクシーな/かわいい)女の子になれ」という命令に抵抗することがなかった。ここに、先の、「アニメの国のヒロインは、女性の権利や解放に心を砕くことがなかった」を並べてみると、先に見た「権利」とか「解放」の内実が何だったのか、よりよくわかるだろう。

⑬ ● 「女の戦い」は「男の戦い」と同質ではない。社会制度の矛盾に気がつかず、それと真直面から戦わず、男の戦士に媚態を売るか、男の戦士のように戦うだけのアニメの国のヒロインが、テレビの前の女の子の視聴者を勇気づける存在だったといえるだろうか。

▽ここまで来てようやく、問4や読解問題2に答えられる。最後の問いかけはもちろん反語。アニメの国のヒロインが、テレビの前の女の子の視聴者を勇気づける存在だったといえるだろうか、いいえ、とても(お世辞にも)いえない。なぜなら、ヒロインたちは、「社会制度の矛盾に気がつかず、それと真直面から戦わず」、また、「男の戦士のように戦うだけ」でなく、なんと、「男の戦士に媚態を売っていた」のであるから。そりゃ、「お世辞にも」ほめられないよね。志は正しく、がんばったけど、負けちゃった、というなら、「お世辞」ぐらいは言えるけど、敵に媚びを売って、(アタ

シをかわいがってね」的フェロモンを漂わせていたとしたら、「貴様それでも戦うヒロインか！」ということになりましょう。

さて、◆問4「お世辞にもいえない」というのはなぜか、の決着を。候補は三つ。

1「アニメの国のヒロインは、女性の権利や解放に心を砕くことがなかったから。」  
2「アニメの国のヒロインは、男の子の気に入る（セクシーな／かわいい）女の子になれという命令に抵抗することがなかったから。」

3「アニメの国のヒロインたちは、社会制度の矛盾に気がつくことも、それと真正面から戦うこともなく、男の戦士に媚態を売っていたから。」

さあ、どれがいいでしょうか？ どれも本文の語句をつなぎ合わせたもの。ベストは「3」。ヒロインが褒められた存在ではない理由は、二種類ある。「矛盾に気づかず、女性の解放に尽力しなかったこと」と「男に気に入られようとしていたこと」の二つである。すなわち、候補1と2を合わせたものが、必要十分な答えといえる。だから、1と2の合体型解答も可。しかし、「3」は、ほとんど抜き出しでありながら、その二つがちゃんと含まれている。だから、123のどれか、といわれたら「3」といったわけ。

「解答例1」「アニメの国のヒロインたちは、社会制度の矛盾に気がつくことも、それと真正面から戦うこともなく、男の戦士に媚態を売っていたから。」

「解答例2」「アニメの国のヒロインたちは、女性の権利や解放に心を砕くこともなく、男の子の気に入る女の子になれという命令に従順に従っていたから。」

さて、今度は、■読解問題2だ。この問いは、先の問4の答えに対して、さらに、「では、なぜ、アニメの国には、女性の権利や解放に心を砕くヒロインがまったくいないほどいなかったの？」と、もう一度、「なぜ」を再問しているのである。

「なぜ」という問いは、本質的に、その答え「Aだから」に対して、さらに、「ほんなら、なんで、Aなのか？」という問いを誘発する。その答えが「Bだから」というものだとすると、最初の問いを突き詰めた答えは、「Bだから」のほうだとも見えてくる。諸君が、「なぜ」という問いに対して答えを迷うとき、あるいは、正解例とされているものと自分の答えがずれるとき、そのとき生じているのは、「この、「原因はAなのか、Bなのか」という迷いとズレなのである。▼これを防止する戦略が、「なぜ型」の問い↓「どのように型」に変換、という手である。

では今回の場合、◆問4と、■読解問題2は、どのように区別したらいいのか。もう一度、設問に立ち戻ろう。◆問4は、実質的には「歴代のヒロインが、女の子の視聴者を力づけ、彼女たちに勇気を与える女性像だったとお世辞にもいえないのはなぜか」という問いであった。■読解問題2は、「なぜ、アニメの国には、女性の権利や解放に心を砕くヒロインがまったくいないほどいなかったか？」である。よく見比べよ。「勇気を与えなかった理由」——「勇気を与える人がいなかった理由」

◆問4は、「歴代のヒロイン」がどのように行動していたか、を答えることによつて答えられた。では、■読解問題2は？ 問4の答えをさらに問うということは、具体的には、では、なぜ、アニメの国のヒロインはどのように行動したのか、と問うことである。なぜ？ ここで、私たちは、もう一段広いフレーム（枠組み）でこの問題を眺めなくてはならない。すると問いはこうなる。では、なぜ、アニメの国のヒロインはそのように行動するように造形されているのか？

考えれば当然だが、アニメのヒロインは、現実の人間ではない。作られたキャラクターである。つまり、だれかが、ヒロインをそのように作り上げているのである。ただし、本文では、だれが、どういう考えのもとに、どのように、ヒロイン像を形成していくのか、ということについて、くわしく書かれてはいない。もし、そういった記述があれば、■読解問題2の解答はそれを書けばよいことになる。でも、ない。どうするか。〈制作者〉の顔がかすかに見えているところを見出すのである！

「そういうコワモテのヒロインは、保守的なアニメの国では面接試験で落とされるに決まっている(⑩)」

「女に一律にセクシーであれと命じる(⑪)」

「女はみんな恋の奴隷であれと命じる(⑫)」

〈制作者〉は、男性に気に入られるようなヒロイン像しか作ってこなかったから、そうでないヒロインは存在しないのである。「a」。もちろん、この答えにも「なぜ」と再々問し、再々答することはできる。なぜ、作ってこなかったか。アニメが現実の反映だという前半の議論をふまえるなら、社会は依然として、(戦うことは戦うけれど)あくまで最終的には男性に気に入られるような女性像しか求めてこなかったからだ。「b」(さらにまだ問えるけど、やめとく)。

「解答例1」「アニメの国のヒロインは、セクシーであれといった、男性が求める女性像に従って作られてきたから。」 ※「a」のみ。

「解答例2」「現実社会が男性に気に入られるような女性像しか求めてこなかったのに合わせて、アニメの国のヒロイン像も、女性解放のために戦うよりは、男性の欲求に従う女性像として作られてきたから。」 ※「a」「b」。

〔余談〕「なぜ？ なぜ？」と究極の根拠に向かって遡及しようとするのは、人間理性の本質だろう。純粋な知的好奇心は、むしろ、子供のほうが旺盛かもしれない。次は『徒然草』より。

八つになりし年、父に問ひて云はく、「私は如何なるものにか候ふらん」と云ふ。父が云はく、「仏には、人の成りたるなり」と。また問ふ、「人は何として仏には成り候ふやらん」と。父また、「仏の教によりて成るなり」と答ふ。また問ふ、「教へ候ひける仏をば、何が教へ候ひける」と。また答ふ、「それもまた、先の仏の教によりて成り給ふなり」と。また問ふ、「その教へ始め候ひける、第一の仏は、如何なる仏にか候ひける」と云ふ時、父、「空より降りけん。土より湧きけん」と言ひて笑ふ。「問ひ詰められて、え答へずなり侍りつ」と、諸人に語りて興じき。

⑭ ●女だからという理由で不当な扱いを受け、くやし涙にくれる少女を、アニメの国は

積極的に描いてきただろうか。組織の差別的な待遇に抗議するような女性隊員は？ 上司や同僚や視聴者のセクハラに断固たる態度をとった紅の戦士は？ こういうことをいって、「もちろん、いた。あの番組では……。」云々と重箱の隅的知識をひけらかす連中が必ず出てくるのだが、総体としてどうかを問うているのだ。(ついでに断っておくけれど、風呂をのぞかれたりスカートをめくられて、キャットと騒いだりビントを食らわせる程度のことを「セクハラに対する抗議」とはいわない。) **読解問題3** 少女に救いは求めても、少女を救うことに、アニメの国は無関心だったのである。

▽確認の問い。「少女に救いは求めても、少女を救うことに、無関心だった」のはどれ？ 答え。「アニメの国」。そう、「保守的なアニメの国」「大きい男の子」の女の子への欲望に忠実なアニメの国」。そんな「アニメの国」は、当然、現実の国を反映した国。

■**読解問題3** 「少女に救いは求めても、少女を救うことに、アニメの国は無関心だった」とはどのようなことか、説明しなさい。

★**切り身の方法**、で順次いかえていけばいい。構文をあれこれ考える必要はないので、かえってこういうのはらくちんだ。あらかじめ、解答の形を作っておくと、

「aアニメの国は、/ b少女に救いは求めても、/ c少女を救うことに、/ 無関心だった、ということ。」。基本的には、この各部分のいかえ。答案を作ってみて、日本語が変わったら直す、という手順だ。

「a 男性の欲望に忠実なアニメの国は、/ b アニメのヒロインにかわいさと地球を救う戦いは求めたが、/ c ヒロインが自分の受けている性的な差別から解放されるといった主題には/ 関心を払わなかったということ。」

これをもとにして、もう少し自在に書いた答案を示しておく。

「**解答例**」 「アニメは男性論に支配されているので、ヒロインに、かわいさや地球を救うといった戦いは求めても、彼女たちを性的な差別から救い出そうという発想は生まれなかったということ。」

⑮ ● 男の子の国の「紅の戦士」をひと言であらわす言葉があるので、紹介したい。

「クインビー症候群」である。七〇年代の初頭、アメリカの社会心理学者のグループが ◆**問5** 「女性解放の足をひっぱる女性」を調査し、明るみに出したのが ◆**問5** 「女王蜂」クインビー症候群」だった。

▽「クインビー症候群 (Queen Bee Syndrome)」は、男向きアニメで紅一点、男に混じって「戦う」女、紅の戦士の特質を表しているという。「女王蜂」<sup>Queen Bee</sup>とは、どういう連中か？ ◆**問5**の検討はもう少し後で。

⑯ ● クインビーは、男社会で「例外的に」成功した名誉男性的な女性であり、世の中に構造的な性差別はないと主張する人たちである。「自分は努力して、ここまで来

た。多くの女性がそうできないのは努力が足りないからである。」が、彼女たちの言い分である。彼女は自分の成功はラッキーな偶然ではなく、自分自身の才能と努力の賜物と信じている。彼女は自分の特権的な地位が気に入っている。自分をユニークな存在として認めてくれ、うまくぬけがけできたおかげで、自分だけが「いい思い」のできる男性中心社会も気に入っている。彼女は、後輩の女性が自分の後に続くことを好まない。女性全体の権利獲得にも冷淡である。女性にも均等に機会が与えられる社会が来たら、彼女の特権的な地位は失われてしまうからだ。

▽**読解ツール**。定義語。「クインビー」男社会で「例外的に」成功した女性。後に続く、クインビーの価値観にも注目。

▽構造的な差別、というのは、努力ではどうにもならない制度的な差別という意味。クインビーは、「努力次第でだれでも成功できるんだから、差別だなんていってるのは負け犬にすぎないわ！」と考えているわけ。諸君はまだ実感を持ってないかもしれないが、同性の部下に冷淡な女性管理職、みたいな像を、仮に思い浮かべておこう。ドラマなどで見たことがあるはず。

◆**問5** 「女王蜂」クインビー症候群」が「女性解放の足をひっぱる」のはなぜか。★「なぜ型」↓「どのように型」へ変換。「クインビーは、どのように女性解放のあしをひっぱる(じやまする)のか」。

「クインビー」が、女性解放にとつてじゃまになることを(する)(または助けになることをしない)わけだが、いったい何を(しない)のか。⑯から探してみよう。

「世の中に構造的な性差別はないと主張する。」

「後輩の女性が自分の後に続くことを好まない。」

「女性全体の権利獲得にも冷淡である。」

彼女たちは、どのように考えて↓このような態度に至るのか。その過程を書けば解答となる。

「**解答例1**—長め」 「男性社会で成功した女性であるクインビーは、自分が男性社会の中で獲得した特権的な地位を確保しておきたいため、他の女性が自分と同じ権利を獲得することを嫌い、性差別の存在を否定したり、女性全体の権利獲得に冷淡であったりするから。」

「**解答例2**—短め」 「クインビーは、自分の特権的な地位を確保したため、他の女性の権利獲得には冷淡で、性差別はないと主張したりするから。」

⑰ ● まさに、男の子の国の紅一点、紅の戦士ではないだろうか？ クインビー、紅の戦士は、紅一点という自らの特権的な地位を愛している。だからこそ、女性の伝統的な性役割も喜んで引き受けるし、戦争に明け暮れる自国にも疑問を持たずにいられるのである。

▽「男の子の国」という表現をしているのは、アニメの世界の話であることを示して

いる。アニメに出てくる「女の隊員」は、男性隊員にキーを焼いてあげたり（女性の伝統的な役割を受容）すると同時に、〈出勤〉となると一瞬にして戦闘マシーンと化す（殺すことに疑問を持たない）。これが、クインビーと同じだといふのである。

⑱ ● ついでに、女の子の国の「魔法少女」に該当する言葉を思いついたので、お知らせしたい。「バタフライ症候群」である。バタフライ症候群の人たちは、男社会で余計な苦勞を背負うのはご免と考え、伝統的な性別によって成功しようと考えた女性である。女の子の国の内側で、きれいに着飾り、蝶よ花よと大事にされれば彼女はそれで満足だ。

⑲ ● 女の子の国のヒロイン＝魔法少女は、まさにこれ。大人の女になって、美しい衣裳に着替えること。彼女たちの「変身」は、さなぎから蝶が羽化するのと同質である。「いまのあたしは芋虫だけど、そのうち美しい蝶々になって、お花畑に飛び立つのよ。」のころだろうか。

▽ 〈男の子の国のヒロイン＝紅の戦士＝クインビー（女王蜂）症候群〉に対する、  
〈女の子の国のヒロイン＝魔法少女＝バタフライ（蝶々）症候群〉。  
違いをチェック。▼定義語のチェック(⑱)。

⑳ ● 現実社会を思い出しても、いかにも「紅の戦士」風の女性、あるいは「魔法少女」を気取った女の子が、あなたの周辺にもいたはずだ。うっとうしいこときわまりないタイプだが、それは彼女たちの責任とばかりはいえない。万緑叢中紅一点という構造のもとで、アニメの国は、クインビー症候群の女とバタフライ症候群の女ばかりを「理想のヒロイン像」としてせせと提出しつづけてきたのである。

▽前半主観的(笑)。後半が主旨。「理想のヒロイン像」が、〈男のようになって男に媚びるやつ〉と〈おんなおんなした女になって男に媚びるやつ〉という、どちらも、〈男に媚びるやつ〉になってしまふのは、社会の論理がいまだに男のものだからである。「アニメ」に反映されている世界は、法制度の上で議論されるたてまえとは違う、何らかの真実を示している。※万緑叢中紅一点＝出典王安石の詩。原意は、新緑に赤い花一輪。

㉑ ● アニメや特撮ドラマはくだらない、なんて大きっぱな話をしているのではない。子どもたちは本気でそれらに没入する。だからこそ、戦後のアニメの国は巨大な王国に発展したのである。しかし、どんなによくできたシステムも、永遠にもつものではないのだ。

▽▼読解ツール「しかし」の後が主旨。アニメにも終わりが来る？ ㉑までの議論とどうつながっているのか。㉑の主旨は、ヒロインとして「紅の戦士」か「魔法少女」しか生み出せなかったアニメに対する批判、もつといえれば失望であった。では、そんなものなら、なくなっちゃえばいい、といっているのか？

㉒ ● ここで私が思い出すのは「進化の袋小路」という言葉である。中生代三疊紀に全盛を誇ったアンモナイトは、絶滅寸前の白亜紀のころになって「異常巻き」と呼ばれる複雑怪奇な形状のものが多発した。きれいな渦巻状だったはずのアンモナイトが、進化できるだけ進化したあげく、最後には、まるで長い紐をこちやこちやに丸めたような異様な形状のものへと姿を変えていったのである。現在のアニメの国は、◆問6 それを思わせるところがある。

◆問6 「それ」とは何をさすか。

★端的に答える、という技法を使ってみよう。意外と有力な技法なので絶対覚えておくこと。すなわち、「あんまりこちやこちや考えずに、ひとことで答えてみる」ことをとつかりにする方法だ。

「現在のアニメの国は、それを思わせる」↓「アンモナイトの姿を思わせる」。  
もちろん、これでは答えにならないので、「アンモナイトの姿とはどのような姿か」と問いを立て直す。アニメの比喩として使われていることに注意。

「異常巻き」と呼ばれる複雑怪奇な形状「まるで長い紐をこちやこちやに丸めたような異様な形状」↓かんたんにまとめたら「複雑で異常な姿」。

しかし、この答えだけを代入して、「現在のアニメの国は、複雑で異常なアンモナイトの姿を思わせる」といつてみても、なんのことかわからない。アンモナイトはつねに異常な形だったわけじゃない。そうなった条件を書き加えて解答しよう。もう一度、〈アニメの比喩〉であることを念頭に置きながら！

「解答例」「全盛を誇り、進化の極点に達した後、複雑で異常な姿に変わってしまった絶滅寸前のアンモナイトの姿。」

㉓ ● アニメの国が草創期から憧れつづけてきた「二一世紀」。世紀の変わり目のいまの気分は「未来はもう古い。」である。『セーラムーン』『エヴァンゲリオン』も『のけ姫』は、その前の最後のひと花だったといえるだろう。アニメの国は、そろそろ転機を迎えている。変革が必要だ。エボシ御前もいつている。「みんな、はじめからやり直した。ここをいい村にしよう。」ってね。

▽主張。▼主張のサイン。「…することが必要だ」。

■ 論述への挑戦

問。筆者は「アニメの国は、そろそろ転機を迎えている。変革が必要だ」といつているが、筆者がどのように主張する論点を要約して示した上で、どのような変革が可能か、考えるところを八百字以内で論じなさい。

※今回の出典の『紅一点論』ぜひ、読んでみてください。おもしろいです。